

短文よきラリと光れ／演習『日本一短い父への手紙』／方言の持つパワーを生かせ／演習『方言で書いたラヴレター』／使うべき言葉はつしかない／エッセイの世界

山本 茂

九州女子大学教授



女子大生のための 文章作法

演習『ひと夏の思い出』／すべての感覚器官を全開しよう／ストーリーテリングにトライしよう／演習『初めて書いたミステリー』／季節の風をつかまえて／最も困難な借金依頼状

演習『伯父さん、お願い、三十万円貸して!』／陽は昇り、陽は沈み、我らは老いる／演習『六十歳になっちゃったアタ。』

山本 茂 (やまもと・しげる)

1937年、北海道夕張郡栗山町に生まれる。北大農学部卒、毎日新聞社会部、『サンデー毎日』編集部記者を経て退職。『ボクシング・マガジン』編集長を六年。独立してノンフィクション作家。

現在、九州女子大学文学部（国文学科）教授。

主著に『物語の女』（中公文庫）、『カーン博士の肖像』『ピストン堀口の風景』『異邦人の拳』『アンラッキー・ブルース』（ベースボール・マガジン社）、『復活』『十字架の男ベン・ジョンソン』（毎日新聞社）、『緑のボランティア 蒙古沙漠をゆく』（ビジネス社）、『拳に賭けた男たち』（小学館）、『松葉杖のラガーマン』『神童』（文藝春秋）など多数。

女子大生のための文章作法

1997年5月10日 1刷発行

著 者 山本 茂

発行者 花田重成

発行所 株式会社 ビジネス社

© Shigeru Yamamoto 1997

〒162 東京都新宿区築地町6（北星ビル）

Printed in Japan

電 話 東 京 (03) 5261-7385 (代)

印刷／シナノ印刷・美和印刷 製本／トキワ製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN 4-8284-0733-2

山本 茂

九州女子大学教授

女子大生のための
文章作法

女子大生のための文章作法▼目次

開講の言葉

11

前期——基礎編

第一講

ヤマト言葉はどこから来たか

17

第二講

段落はコーヒー・ブレイク

25

第三講

句読点の実践的使用法

39

第四講

漢字・仮名まじり文は美しい

47

第五講

擬音は生きている

55

第六講

短文よ、キラリと光れ

65

第七講

演習『日本一短い父への手紙』

71

第八講

方言の持つパワーを生かせ

87

第九講

演習『方言で書いたラブレター』

95

第十講

使うべき言葉は一つしかない

111

後期——実践編

第十一講

エッセイの世界

121

第十二講

演習『ひと夏の思い出』

125

第十三講

すべての感覚器官を全開しよう

139

第十四講

ストーリー・テリングにトライしよう

149

第十五講

演習『初めて書いたミステリー』

153

第十六講

季節の風をつかまえて

165

第十七講

最も困難な借金依頼状

177

第十八講

演習『伯父さん、お願い、三十万円貸して!』

179

第十九講

陽は昇り、陽は沈み、我らは老いる

191

第二十講

演習『六十歳になっちゃったアタシ』

195

あとがき——可能性を信じて——

211

カバーデザイン▼狭山トオル

女子大生のための文章作法

開講の言葉

(一九九六年四月九日)

山本茂です。北海道夕張郡角田村（現栗山町）という寒村に生まれ、東京で三十数年のジャーナリスト生活を送り、九州にやってきました。いま日本縦断を果たした感じです。

本日、この第一时限はみなさんにとっては入学して最初の講義であり、私にとっても大学の教師としての記念すべき初講です。きょう、ここに、このようにしてみなさんと出会うのは、一つの奇跡だと思っています。私たちは同じホモサピエンスの血を持って誕生しても、もし私がシナントロプス・ペキネンシスで、あなたたちがアウストラロピテクスだったら、こうして同じ教室で出会うことはなかったでしょう。あるいは互いにほんの二、三年ほどのすれ違いがあったら会えなかった。私たちの出会いは奇跡的な確率で実現したと言えるのです。この出会いを大切にしようではないか。そして、この一九九六年四月九日、火曜日という日を忘れないでいよう。

さて、私は本日から「文章力をつける」という講義をするわけですが、作文の勉強などは小学校や中学校で終わっていると思っていた。大学にこのような講義科目があるなんて知らなかった。現在の学校教育がいかに受験勉強に偏重しているか、その弊害を痛感しているところです。文章を書くことの大切さは言うまでもないでしょう。電話で五時間話しても、後に残る言葉は一つもないと言うことはしばしばある。しかし、電話では延々と愚にもつかないおしゃべりをする女性も手紙では素晴らしい詩人になれるのです。

今の若者は本を読まず、本を買わず、本の魅力を知らないと言われます。したがって私のような作家は食えなくなる。私が貧乏しているのは諸君のせいである、と恨みの一つも言いたい心境です。

美しい文章は女性のイメージを美しくします。太宰治に『女生徒』というチャーミングな短編小説がある。太宰が送られてきた無名の女性の手記をもとにして書いた小説です。このモデルとなった女性はなかなかの「手紙美人」だったらしく、太宰の友人が彼女の手記にすっかり惚れ込んで「僕は絶対に彼女と結婚する」と宣言して結婚の申し込みに行ったが、これは結ばれなかった。どうも相手の女性は背が高すぎたらしいですね。太宰夫人の美知子さんから直接伺ったことがあります。しかし、文章はこのように未知の男性を虜にするほどの力を持っているのです。

文章力はたしかに生まれながらの天分の要素は小さくありません。市販されている文章講座の本に必ず引用されるギリシャの哲学者、プラトン（紀元前四二八？～三四七）の言葉があります。彼はこう言っています。

「文章とは天賦のものだから誰でも良い文章を書けるわけではない」

身も蓋もない話ですね。しかし、プラトンの弟子、アリストテレス（紀元前三八四～三二三）は師の言葉を少し修正して、こう言っています。

「文章は飾りを主とするものだ。ゆえに、飾りの仕方を学べば上達する」

彼の言う「飾り」とは修辭法のことだと思われます。

古代ローマの雄弁家、キケロ（紀元前一〇六～四二）は別の言い方をしています。

「文章はかなり天賦の部分もあるが、下手な人でも練習すればうまくなる」

当たり前のことですが、何だかホツとしますね。

私はこのキケロの言葉を信じ、励まされながら、これから私なりの文章講座を始めたいと思います。

▼前期——基礎編